

# ルミナリエとアート・エイド

一阪神・淡路大震災後における行政と市民の文化への関わり一

土井 七海

## はじめに

「神戸ルミナリエ」「アート・エイド・神戸」、この2つを皆さんはご存じだろうか。神戸市の旧居留地周辺で毎年12月に行われる、十何万個の電飾を用いて夜の神戸に光を灯す光の祭典「神戸ルミナリエ」は今では全国的にも知られている、神戸の冬の風物詩である。「アート・エイド・神戸」は、神戸の文化は自分たちの手で守ろうという決意から生まれた芸術家を支援する団体である。

一見、関係がなさそうな2つのものであるが、共通点と相違点を持っている。共通点は、どちらも1995年に兵庫県を襲った阪神・淡路大震災をきっかけに作られたものであり震災後の神戸における文化を語るうえで欠かせないものであるということ、相違点は「文化」という同じ領域に括られるもの同士であるが、主催者が異なることである。「神戸ルミナリエ」は兵庫県や神戸市など行政が主導して行われているが、「アート・エイド・神戸」は海文堂書店元社長の島田誠という、1人の神戸市民が中心となっ  
て行なっていたものである。

行政主導の文化活動と民間主導の文化活動、この2つの間にはどのような違いがあるのだろうか。本稿では「神戸ルミナリエ」と「アート・エイド・神戸」を比較しながら、震災後の行政と民間の文化への関わり方の共通点と相違点について考察していきたい。

## 行政による文化活動 一神戸ルミナリエより一

まずは神戸ルミナリエについて考察する。

神戸ルミナリエとは、震災当時の兵庫県知事貝原俊民が震災で傷ついた被災者を励まし、復興をアピールするためのイベントを発案し、それを受けた大手広告代理店が企画、運営したことに端を発したイベントである。

「阪神・淡路大震災の犠牲者への鎮魂の意を込めるとともに、神戸のまちの復興・再生への夢と希望を託す」<sup>1)</sup>という目的を定め、神戸ルミナリエは1995年の12月から毎年、2週間にわたって旧外国人居留地および東遊園地の夜をライトアップするようになった。当初は1回限りの予定であ

ったが、市民や地元産業界からの継続を求める強い声に後押しされて、現在18回開催されている。

ここでルミナリエの運営形態について確認しておきたい。ルミナリエは、運営資金の約半分が多数の協賛企業の参加によって得られた協賛金や企業募金で賄われているが、残りの約半分は神戸市の予算から支出されている。また、主催の神戸ルミナリエ組織委員会は兵庫県や神戸市などの行政によって組織された団体であり、ルミナリエ開催や運営方法などの決定権などルミナリエに関する権限を持っているのは運営主体である組織委員会だ。したがって、神戸ルミナリエとは民間企業も資金面や運営面において参画している行政主導の文化活動である。

主催者側は、ルミナリエは集客観光促進の復興事業として成功し神戸に大きな経済効果をもたらしたと同時に、神戸市民に「鎮魂と復興への希望」という大きな財産を与えられたと評価している。しかし、来場者や地元住民、周辺店舗の人たちも同じような意見かというところではなく、かなり温度差が感じられるものが多数挙がっている。

「派手でエネルギーの消費である」「震災で本当に苦しんでいる人のためになっていない」「来場者に震災鎮魂の精神が感じられない」「来場者の増加によってマナーの悪化と尋常でない混雑が発生している」「経済効果主眼の戦略に継続の必要なし」「人は多いが売り上げにつながらずルミナリエの効果は薄い」「本来鎮魂の場なので経済効果に期待すべきでない」<sup>2)</sup>

などと反対意見は開催側・来場者側の両方に関するものがあり、数え始めたらきりが無いのだ。

また、主催者側も「ルミナリエの及ぼす経済効果、観光復興等といった恩恵の確保のために継続」すべきという意見と「震災の記憶を忘れないために継続」すべきという意見の間で揺れている。商業的だという批判を緩和するためか、開催費用は来場者・市民による個人募金やルミナリエ宝くじといった「商売目的でなく集めたお金」でなるべく賄おうとしている。また最近では、東日本大震災の鎮魂の祈りと復興支援のエールを送り世界中の地震の被災地へ自然災害被災地支援募金として集めたお金を送るといった活動も同時に行っている。神戸ルミナリエは震災後も長期間継続されているなかで、市民の不満・批判に対処するため、このような形で、年々薄らいできた開催意義に再び意味づけを施しているように見受けられる。

## 市民による文化活動 —アート・エイド・神戸より—

それに対して、アート・エイドはどのような経緯で活動が始まったのだろうか。「奇跡的に生き残っただけに、私たちが地域に貢献できることはなにかと考へて『アート・エイド・神戸』という運動を始めた。」<sup>3)</sup>と、発起人の海文堂書店元社長の島田誠は述べている。

震災直後、彼は生き残った感謝を込めて真剣に自分たちが役に立つことをできないかを探していたところ、ある知人から被災者のためのチャリティーコンサートを神戸で行うことはできないかという相談が持ちかけられた。すると、他の知人からも次々と同じような相談がやってきた。そこで、島田は音楽や絵画だけではなく、芸術全般に取り組みうと考へ、あらゆる分野の芸術家たちを支援する民間の団体を設立した。それが、アート・エイド・神戸である。

アート・エイド・神戸の運動は「文化的窒息状況を撃ち破り、芸術の力で、生きる勇気や希望を与える活動をできるだけ早く立ち上げていく」ことが当初の使命であった。

したがって緊急出動の短期決戦と考へていたので確たる資金計画があったわけではない。初期活動の資金四十万円は公益信託・亀井純子基金<sup>4)</sup>から支援を受け、チャリティー美術展での売上が芸術関係者緊急支援制度へと結びつき、音楽会や、詩集の出版、文化活動への助成制度へと展開していった。(島田 pp. 190-191)

ここから、アート・エイド・神戸は行政などの外部の力には頼らず、市民が市民の力だけで自立することを目的とした文化活動であったことが分かる。そして、音楽会や詩集の出版だけでなく、美術展や建設仮囲いの壁面に絵を描くイベントなどを成功させ、7年間の活動で約4000万円の活動支援、助成を行ったのである。

## 行政と市民

2つの文化活動について調べていて、筆者はあることに気がついた。それは何かと言うと、行政側も民間側もどちらも文化活動に復興への切実なる願いが込められているものの、行政に対する批判を述べたものは多く、一方、アート・エイド・神戸を含む民間に対する批判が述べられたものはほとんど無かったということである。文化活動における市民の行政批判をどう考えればよいだろうか。

ルミナリエの例で見たように、市民は行政に対して、少しでも不満があれば、すぐに文句を言って改善しろと抗議する。すなわち、それは私たち市民が、行政とは市民がしてほしいと思っていることを何でも叶えてくれる完璧な存在であると心のどこかで思っている部分があるのではないだろうか。しかし、行政には人的な限界もあれば予算の制約もあり、多数の対立する意見を調整せねばならず、すべての市民の要望に答えていくことなどそもそも不可能なのである。

ここで、市民と行政の関わりについて島田は次のように述べている。

被災者支援の現場で、あるいは外国人問題で、まちづくりの現場で、高齢者、障害者、教育、環境、文化などの領域で、行政の手の届かない領域を、あるいは行政の画一性に対して個別性の取組みとして、こうした市民活動が大きな役割を果たしはじめている。

地域の抱えたいろいろな問題を市民自身の手で、あるいは行政とのパートナーとして取組む活動は、自立した市民による、あるべき社会を予感させる動きである。(島田 p195)

つまり、市民は行政におんぶにだっこの状態ではなく、自らの力で動いていく必要があるのだと考えていることが分かる。

また、島田は次のようにも述べている。

芸術文化とは、そもそも個々の独創的な表現を追及するものであり、公共の利益の概念になじまない。その時代の概念を打ち破ることにこそ活動の本質があるといっても過言ではない。

したがって、文化の育成を、全て行政の保護のもとに置くことは、芸術の根を絶やすことになる。市民活動の重要な由縁である。(島田 p197)

ここで言う「公共の利益」とは国民全体にとって役に立つものや皆に等しく還元されるようなもの、すなわち、道路や公共施設などインフラの整備などが当てはまると考えられる。これらは行政が果たすべき仕事であるし、とりわけ震災直後にはこれらの復旧が急務とされる。したがって、震災直後の行政に文化活動を求めることは困難なことであるし、特に、芸術という全ての人にとって等しく必要とされるものではない領域は、そもそも行政の考えと馴染まない島田は考えている。また、行政に求められる公共の利益の充実を経済的な面から考えると、多額の資金を必要とするものであることが分かる。しかし、前にも述べたように、行政は限られた予

算の中で政策をしていかなければならないという制約がある。したがって、神戸ルミナリエのように行政が主導となり、かつ、やり方次第では利益を生み出すことができる可能性がある文化活動を行うと、どうしても商業的な側面が強くなってしまうのかもしれない。

以上のことから、私たち市民は行政が行う文化活動における不十分な面や商業的になりがちな面に対して批判ばかりを言うのではなく、アート・エイド・神戸のように、市民の側から積極的に文化に関わっていくことが必要とされているのだと島田の著書から考えることができるのではないだろうか。

## おわりに

行政主導の文化活動にも民間主導の文化活動にも、それぞれ復興の願いが託されている。しかし、行政という立場上、公共の利益を優先しなければならないこと、商業主義に走ってしまいがちになってしまうこと、そして、市民からの批判を受けやすいという立場から、“行政による文化活動は未熟だ”という物語が私たちの中で自然と語られているのではないだろうか。しかし、行政にも市民にも、それぞれの役割がある。ここで、最後に、島田の言葉を引用しておきたい。

市民活動と、行政のあるべき二人三脚とは、どのような形でありうるのか、今、真剣に議論されなくてはならないし・・・市民活動の役割を高く評価してきた地域として、市民活動を制度として、新しい市民社会に根づかせることは大切な責務である。(島田 p164)

行政が自らの考えだけで文化活動を行い、受け身の市民が気に入らない点について批判だけして改善を待つという関係をこのままにしておいてはいけない。行政は市民のための文化活動と考えるなら、市民の声をたくさん聴きとって、文化活動に反映させる。一方の市民は誰かがやってくれるのを待つのではなく、“自分たちの文化は自分で守る”という意気込みで、島田誠のように自分たちで何かできることはないだろうかと探し、活動する。このように両者が「文化」という一つの領域に関わりあっていく形が、今求められている文化のあり方ではないだろうか。



島田のギャラリーも参加して 2011 年に行われた、Chain of Art という美術展のチラシ。「アーツエイド東北」を支援するためのもの。Gallery Shimada Official Web Site より。その活動はまだまだ健在である。

## 注

- 1) 竹川猛「阪神・淡路大震災復興事業 神戸ルミナリエの取り組み」  
[http://www.jichiro.gr.jp/jichiken/report/rep\\_hyogo34/08/0823\\_jre/index.htm](http://www.jichiro.gr.jp/jichiken/report/rep_hyogo34/08/0823_jre/index.htm)
- 2) 梶村薫、平山洋介「発光都市—神戸ルミナリエの都市戦略—」『日本建築学会近畿支部 研究報告集』2000, p4
- 3) 島田誠『蝙蝠、赤信号をわたる アート・エイド・神戸の現場から』1997 神戸新聞総合出版センターp30。以下同書からの引用は本文中に(島田 p\*\*)と略記する。
- 4) 島田は、癌で40歳の若さで逝去した亀井純子から1千万円の貯金をもらい、震災以前から若い芸術家の活動を支援する「公益信託・亀井純子基金」を設立して、事務局長として組織づくりと公益信託の手続きを担当した。いわば、アート・エイド・神戸の理念の原型となった団体である。

2012年の誕生日は皆さんどのように過ごされましたか？私はこの原稿の資料集めをするために、阪神淡路大震災に関する様々な資料を集めた「震災文庫」という図書館が設置されている神戸大学へ行きました。本当は誕生日に行きたくなかったのですが、年末に空いているのがその日しか無かったからと、年明けに「はじめに」の提出期限が迫っていたからとで、行ってきました。

震災文庫には、震災に関する論文や一般雑誌の小さな記事までたくさんの震災に関する資料が揃っていて、今までネットなどで検索しても見つからなかった資料や情報を知ることができました。なので、調べても調べても読んでみたい資料が次々として出てきて大変でした。奈良女にもこのような特別な図書館があれば良いなと思いました。

ちなみに、見た目では分からないのに「奈良女生とばれないように神戸大生っぽくしていよう」と思いながら構内を歩いていましたが、今思い返すと、かなりきょろきょろしてしまった(大学がめっちゃ広い!!)ので、すぐに他人だと思われたような気がします。そんな1日でしたが、家に帰ってから誕生日ケーキを食べられたので誕生日らしく過ごせました！

土井七海